



地域研究の魅力 — 地域経済学科がめざすもの —

2003年4月北海学園大学経済学部は、地域経済学科を開設しました。その設置がめざしているものは何か、また、地域研究のどこに魅力があるのか、を小田清教授、竹田正直教授、高原一隆教授、奥田仁教授に語っていただきました。

街づくり・地域づくりの新しい芽を育てる

高原／地域経済学科を発足させた目的は、道内の学生が9割、札幌出身者が6割以上というこの大学の特徴を活かして、北海道における21世紀にあたっての新しい地域づくり、街づくり、村おこしの担い手と、その新しい芽を育てていくこと、それを一番重要なテーマとしたのだと僕は思います。

北海道のどこにどういう芽があるのかは、個人的にはまだ模索しているところですが、アットランダムにみてみよう。例えば、下川町の森林クラスターとか、釧路に行った時に出会った中小企業のネットワーク的な組織も、面白いネットワークとしてユニークな活動をしていました。『**第三のイタリア**』のネットワーク(2頁参照)のような共同受注の北海道型を追及し、地域づくりの一翼を担っているのです。

マクロ的な地域圏の点では、まだ大きなうねりではないですが、新しい芽としてこういう興味深い活動がたくさんあります。そして、その担い手が求められています。

小田／北海道は開拓以後国の政策を中心として動いてきましたが、近年第一次産業は貿易自由化で大変な状況ですし、国策として位置付けられてきた石炭産業も外国依存への転換で衰退し、現在失業率が全国でも高い地域のひとつとなっています。また、北海道開発庁や開発局も改組転換のもとで縮小されています。北海道の経済、庶民に関わる生活は苦しい。

そこで、新しい北海道をどうするか、また、そのために若い人たちが新しい地域づくりをするにあたって、新しい発想を持った有望な人材をどう育成するのが重要になります。そして、彼らができるだけ北海道に定着し、単に経済だけでなく、生活や環境、他の地域との交流を含めて、どのように学んだことを活かしていけるのか。このように地域について考えることを前提として、地域経済学科は新設されました。

環境を考え、都市と周辺の新しい関係を築く

小田／地域経済学科は、経済や生活、環境、国際交流も含めて総合的に考えていくものです。また、地域という言葉は、単に「地方」という狭い意味ではなく、もっと広い意味を持っています。例えば、札幌市、東京都も一つの地域だし、いろんな国々もある意味では一つの地域を形成している。そして、産業構造や地域のあり方など、それぞれに問題を抱えていている。われわれが暮している都市も農村もです。そこで将来、生活の再生産を維持発展させ、将来に安心して暮していける地域をどう創るのか、そうした問題を考えてもらいたいのが地域経済学科です。ですから、幅広いカリキュラムを編成しています。

竹田／札幌という地域で言えば、目玉となる観光やコンベンションで多くの人々が誘致されています。札幌まつりやYOSAKOIソーラン祭りなどで活性化され、その期間はホテルを確保するのが難しいような状況です。その中で、エコロジックな街づくりの取り組みとして、ホテルが自分のところで処理した残飯を、石狩市の農家の肥料として使い、環境を考えた『化学肥料を使わない農業』を営む。つまり一次産業と三次産業が循環をつくりつつあるわけです。

また、漁業においては、厚田村などで『森は海の恋人』として協同組合が植林活動を行い、さらに農林業である一次産業を二次産業の製品加工にもつなげ、様々に多面的な地域おこしが行われています。そして、その製品の販路として札幌があります。つまり、大都市とその周辺地域との間で産業構造の関連ができ、さらに環境を考えた立体的な意味での課題が地域のつながりの中からでてくるのです。

石狩市ではロシアと国際交流を追及し、最近では、サハリンとの交流を強め産業交流・友好交流をしています。石狩市が

独自に情報を集め、1996年から始まったサハリン北東部の石油開発でのガスパイプラインをめぐる、石狩湾をうまく活用できるかもしれない、そこに地域の発展をかせよう、と。そこでも絶えず、国際的な視野、地域性と国際性が関わっているのです。北海道を扇の“要”にして、カナダ、ロシア、中国、韓国、そして欧米や北欧も視野に入れて地域を考えると、いろんな面白いテーマが出てくるのではないのでしょうか。

自分の街が一番、と思うには

奥田／高原さんの著書で、『発展なき成長』という言葉が紹介されていましたが、札幌はそれにぴったりですね。札幌は、北海道内の他全部の地域がめっちゃくちゃになったその上に立って発展しているように見えます。

しかし、内実としては、産業・産業構造・文化的な面でまだまだ低いところがある。

札幌に住んでいる人、特に学生には、自分のまわりだけを見て、「札幌は住みよい街だ」と思うのではなく、実は足元は掘り崩されつつあるんだよ、ということにぜひ気づいて欲しい。つまり、地方のことを無視して札幌の発展はないのです。

特に何が問題かといえば、やはり、根深くある一極集中型、ヒエラルキー型の見方・考え方が強く残っていることです。20年前、置戸町の沢田さんが(現在滋賀県の県立図書館に勤務されています)社会教育課長を務めながら、街づくり、街おこしの中に文化を位置づけました。巡回図書館をつくって貸出し冊数が日本一になるまで創りあげ、置戸の町民はそれ程本を読んでいるのです。あの当時のことを考えると、文化を軸とした街づくりという点で非常に先駆的でした。その当時彼が、「もう札幌だけ見てはだめで、全国的なレベルに視野を広げ、著名な文化人を呼んでくる。その取り組みは早く、その後の円高の元では、全世界にまでその視野を広げてます。」と言っていましたね。

その点で、僕のノルウェー留学でも同様の印象を持ちました。ノルウェーの大学の先生と一緒にドライブしていると、

「第三のイタリア」とは

第三のイタリアとは、近代工業が最も早く進んだイタリア北部、経済発展の遅れたイタリア南部に対して、中小企業のブランド品などに代表される高度な技術を持ち、イタリア経済を牽引しているイタリア中部地域を指します。



▲写真右から竹田教授、小田教授、奥田教授、高原教授

ポツンと農家があって、「ここはカーネギーホールで講演中のオペラ歌手の家だよ」とか、「この人は世界的に有名な画家になった」とか、国際的なレベルの文化人が田舎のあちこちに住んでいるというのです。地域における文化レベルの高さ、そして自分達の地域が一番なんだ、という意識が日本とは違いました。つまり、日本では、まず東京が中心にあつて、そして札幌があり、旭川がある、という具合ですが、ノルウェーでは自分達の地域が一番だ、という『築いてきた高い到達点への確信』と『地域に対する意識』が強い。日本もそうならないと、一極集中や地域問題も解決していかないんじゃないでしょうか。そういうものを創っていくのに、その核となる人が地域に求められているのです。

自分たちの街は自分たちの手で創る

高原／地域における人材育成ということ言えば、北海道大学の学生は公務員志望者が多いのですが、ただ「上から」言われたことだけをやる公務員になってしまわないように、自分が勤めている役所を通じて自分達の街や村を住民とともにどう創るのか、それを本気になって考えてほしい。そりゃ生活が安定していることは大事ですが、それだけで終わらせないで、役所に入って「いい仕事」をして欲しい。自分達の街を自分の手で創る。最近では、TMOみたいな仕事をしたいという若者が増えてるし、もっと“自分たちが担い手になる”という意識で街づくりに目を向けてほしい、と感じています。

竹田／岩内町は、かつては漁業が中心でしたが、最近加工をする拠点となってきました。さらに有島武郎ゆかりの地ということで、ニセコ町などの周辺の町村と『環』をつくり、観光での人気も数倍でできた。それに加え、海洋深層水に資金を投じ、その構想に自治体職員も自ら地域をひきあげる、という姿勢で考えている。この水の活用方法として、温度が低い特徴を利用して魚を氷の中のように睡眠状態にし、エネルギーを消費させないで生きを失われないよう保存する。つまり、この水を使うと採った魚の鮮度を保つことができるのです。また、ミネラルも豊富で化粧水にもなります。このような“水を様々な活用をしよう”というアイデアを生かす取りくみに、技術の助言者や経済関係の人たちとともに、自治体職員自身も積極的に加わっています。

地域を再認識する

小田／地域経済学科への進学を志望する受験生には、まず自分の地域がどういう地域か、しっかりと関心を持って欲しいですね。そうすると、気がつかなかったことが少しずつ見えてきます。過疎地域とか札幌以外の地域は「ダサイ」ように見えたりしますが、足元を見直すとすばらしい色々な活躍の場が見えてきます。実際本当にさまざまないろんな力を持った地域の人々に、地方は担われています。

道南の乙部町の調査で聞いたことですが、ここは漁業と農業の地域で特産品を作っていくことが必要でした。そのため

戦前から外国とつながりを持ち、今もアラスカとかカナダなどで、数の子やタラコの加工をしています。その加工・保存の方法を教えたのは乙部町の水産加工の人たちで、今も指導員として雇われており、半年は海外で暮らすそうです。このように小さな地域から、グローバルな広がりを持った仕事に携わっているんです。

竹田／たとえば、先の岩内町では、北海道の地域と国際的な地域との関係をどう考えるのかな。まだ北海道では深層水を国内でのものとしか考えていないけど、ロシアのバイカル湖でもその活用が考えられています。その利用の比較などもできるのではないかな。国際的な広がり可能性も考えられますね。

小田／それから、自分の地域と札幌の生活を比べてこの札幌でもいろんな問題を抱えていることを知り、考えて欲しいですね。例えば、最近では札幌市内でも、かつてはあまりいなかったホームレスの人たちを見かけます。このことは北海道全体が停滞していることと関わりがあり、地方から来てても仕事がないことの影響がでているのです。しかも、今ではフリーターの仕事ですら少なくなっている。ですから、「光と影」の両方、「地方と都市」の両方、そしてそれをつなげて全体をみることで、しかも、経済や地域・生活など広い視野での問題意識を持つことによって、その能力が将来につながっていくのではないのでしょうか。

求められる国際交流の担い手

奥田／重要なことは、そういった国際的な結びつきや地域と地域を結びつける人材が地域に存在しているということです。役所を通じて、とか外務省を通じて、というお定まりの関係のもとでなく、地域で必要になっている問題を真剣に解決するために、同じような課題を抱えている地域を探し出して交流し、情報を互いに集めたり交換することができるような人材が必要です。そうしなければ、地域交流の活性化といっても、お題目で終わってしまいます。

小田／かつて、国と国との交流は姉妹都市などでのつながりが多かったのですが、最近では狭い地域の間で、しかも住民と住民とのつながりが可能となっています。グローバル化した交流を自分たちで創っていける。これが経済交流などを含め様々な広がりを持つてくるのです。

奥田／この10年ぐらいの間に、そうした住民からのグローバルな交流ができる条件ができたと思います。インターネットの発展は、自分と同じような問題について悩み、発信しようとしている人をすぐ見つけることを可能にし、しかも、世界のどこかにいる人たちともメールで簡単にアクセスすることを可能にしました。ですから、機械に使われてはこまるけど、世界中の人と交流できるこの基盤を地域づくりに生かしていくことができるのです。

小田／世界的な視野で他の地域から学習するということは、一つの『グローカル』(グローバルとローカルで考える)と言えます。来年度から始まる『地域研修』の講義では、直接地域を訪問します。観光などでしか行くことのない倶知安町へも研修

で行きます。ここはスイスのサンモリッツと交流を持って色々なことに取り組んでいるのです。遊びに行くのではなく、「地域の人たちがどういう思いで地域づくりをやっているか」を勉強するいい機会となりますよ。倶知安町だけじゃなく、数ヶ所の地域で実際に勉強できるのがこの講義です。

多様な地域の人々から学ぶ

高原／これからの街づくりは「偉い人」や一部の有力者によってではなく、“みんなの力で”という確信を持つことが大事です。それが「業を起す」起業家の育成にも繋がるのです。どうも道内の人は道外に出たがらない人が多いようですが、私の実感ではもっと道外や海外へ出ているいろいろ観に行っただ方がいい。お金はかかるけど(笑)。学生の時に色々な所に行って、各地域を体験したほうがいい。

竹田／私の講義では、ロシア人との交流を通じて学習を深めてますが、最初、ロシアについてのイメージや印象を学生に聞いたならば、「大きい」「寒い」「汚い」「古い」とか悪いイメージばかりだったのです。でも、日本の祖先のある部分はシベリアから入ってきたなどロシアの学習をした授業の後、改めてアンケートを採ったところ、“ロシアに行ってみよう”“身近に感じた”“高等教育が発展していて、日本の学生のように甘やかされていない”など印象が大きく変わりました。教える側が地域と世界を結び付け、視野を広げる教育をしていく、外国やその国の人々を知り、交流していくと学生の意識は変わるのですね。

高原／道外の大学と交流することも考えられます。僕も出身の国立大学で私立大学と交流をした際に、その経験が何にも代えがたい刺激だったと感じています。

竹田／私の授業でも、ロシア人と一緒に合宿をしますが、一晚懇談会などとして非常に盛り上がります。

奥田／北海道の学生は内向きがちですが、それでは自分の地域づくりができません。足は地についているけど、目は外に向けられないいけない。その中で、地に足ついた新しい発見が得られるのが地域研究の魅力なのです。

(この対談は、7月17日に行われました。)

地域経済学科開設記念シンポジウム

テーマ

市町村合併と地域づくり

—地域のあり方・将来のマチづくりを中心に—
9月21日(日)に開催されました。

パネラー

大阪市立大学教授/自治体問題研究所理事 加茂 利男
北海道・奈井江町長 北 良治
高知県・馬路村村長 上治 堂司
北海学園大学教授/北海道知事農業顧問 太田原 高昭

コーディネーター

北海学園大学教授 高原 一隆

『グローバル化における家族と労働市場そして国家』

—カナダ、日本、スウェーデンなどを比較する—

経済学部特別講演会

5月12日(月)にカナダ・カーレトン大学人類社会学部教授のワラス・クレメント教授を講師としてお迎えして経済学部特別講演会が行われました。

今回の講演会も多数の学生が参加し積極的な質疑応答がなされる活気あるものとなりました。

今回の講演内容は経済学においては“Family economics”や“Dual labor markets”と深い関連をもつ内容であり、これらの分野に関心を持つ学部生や院生に大いに刺激を与える内容でした。学生にとって経済学とは違った角度からの労働市場への考察は、普段の授業やゼミナールで学ぶ“経済学における労働市場”の分析とは違った発見的推論を与えてくれました。今回の講演会は卒業論文や修士論文作成への大きな助力となったことと思います。



人物紹介

クレメント教授はマックマスター大学で修士号を、カーレトン大学で修士号および博士号を取得されています。1996年には本学人文学部の客員教授として一年滞在し、本学経済学部教員と日本、アメリカ、カナダの労働市場に関する比較研究交流を行いました。また2002年にはカーレトン大学最高位教授に任命されており、現在においてもスウェーデン、ドイツ、日本、カナダ、アメリカ、オーストラリアの家族態様・労働市場・国家形態に関する比較政治経済学の研究に取り組まれています。

講演内容

クレメント教授は、高度に発達した脱工業社会が、労働生産活動の分野における急激な変化に対していかに対処していくことができるか、という点に問題意識をもっておられます。しかし、労働市場における変化は、カナダ、日本、その他の先進国間でかなり異なった展開を示しており、この事実は労働市場は単に経済的発展の所産ではなくグローバル化といった境界のはつきりしない広範な諸力の所産であることを意味し、よって教授はこれを重要な事実として強調されました。また労働市場が失業、職業訓練、教育、移民、民族、種族、性別、家族（幼児や高齢者の介護）、年齢（青年や高齢者）といった

多様な事象に取り組む公共政策の中心的構成要素をなしている点からも、労働市場の性格が国ごとに多様である、という点が政策上の実際的な見地からも重要であることを強調されました。

クレメント教授はこのような問題意識をもって、複合的な視角から先進諸国における労働市場の変動に対して家族や社会や国家はいかに対処し対応していくか国際比較を通じての考察を述べられました。



基礎ゼミ

奮闘記

K I S O Z E M I

基礎ゼミのねらい：一年生教育の充実

今回の学部の改組、そしてカリキュラムの大幅な見直しの中で、一年生教育の充実の必要性が強調された。今年度から本学部で開講された基礎ゼミは、その具体化のひとつである。

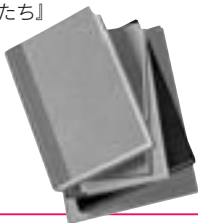
この基礎ゼミの目的は何か。まず学業面では、学生が主体的に学ぶ姿勢と方法を身につけるといことを重視している。単に与えられたものをこなしていくのではなく、自ら問題を発見するというにはじまり、その問題をどう把握すればよいのか・その把握したものを他者にどう伝えるのか・あるいは立場を変えて、他者の意見や考えをどう受け止めるのか等々を考え実践する。そのことを通して、大学で自分の問題意識を獲得し、「何のために学ぶのか」「どう学ぶのか」を身につけることにある。

基礎ゼミの進め方は様々だ。テキストを使う教師もいれば使わずに毎回学生の関心のあるテーマを扱っているゼミもある。いずれにせよ担当教師の専門性・個性が発揮されて、様々な(表1参照)テキストが使われたり、多様なテーマ(構造改革、環境問題、社会保障、イラク戦争、教育問題、等)でゼミが進められている。但し、共通するのは、毎回レポーターが報告をした後に、ゼミ員全員で討論し認識を高めようということだ。学ぶというのは個人的な作業ではなく協同の作業であり、この基礎ゼミの場では、その実践が図られているのである。

学業以外の面でいえば、仲間づくり、そして大学生活をどうやって充実させていくかということを考え実践する場のひとつに基礎ゼミを位置づけている。大学に入学して生活の急激な変化にとまどうことがあっても大丈夫。基礎ゼミは、学生10人強に対して教師1人のサポートという構成なので、教師との距離も近くいろいろと助言を受けることも容易なのだ。

表1 基礎ゼミで使われているテキストの例

- 佐藤 学『「学び」から逃走する子どもたち』
- 岩田規久男『経済学を学ぶ』
- 鷲巣 力『自動販売機の文化史』
- 植田 和弘『環境経済学への招待』
- 神野 直彦『地域再生の経済学』
- 西村 和雄『学力低下が国を滅ぼす』
- 刈谷 剛彦『大衆教育社会のゆくえ』
- 池上 彰『そうだったのか！現代史』



失敗もあれば苦悩もあるさ

さて以上のように基礎ゼミのねらいを書いたが、基礎ゼミは今年度から開講されたばかりのものなので苦悩はいろいろある。設備がまだまだ十分ではないという問題にはじまり、学生の関心がばらばらなので応えきれない、さらに、学生の主体性を期待しているはずなのに学生が静かなために授業が「寒い」(!)ときがある、などだ。もっとも、この学生の姿勢についていえば、大学に入るまでこうした主体的な学びを体験してこなかったことが大きいわけであるし、学生の主体性をひきださきれていない教師の力不足も一因としてあるかもしれない。そのあたりは改善の余地ありである。

学生はどう評価しているかな

ではここで、学生がこの基礎ゼミをどう評価しているのか聞いてみよう。

- 日本が抱えている、自分たちに親密な問題を具体的に話し合えるし、わかりやすいからヤル気が出て、よい気がする。テーマを面白くすれば、なお良いと思う。
- 今まで経験したことのない授業のスタイルで色々な人の意見が直接聞くことができ、自分では考えられないようなことを教えられたり、新しい発見や新しい考え方が身についたりしたと思う。日本の教育では少なかった対話、討論を交わす授業スタイルが新鮮な感じがして面白い。
- ゼミの今の状況はまだまだ発言が少ないと思うのでテーマをもっと皆の関心のあるものにすればいいと思う。高校ではなかったディベート形式の授業は非常にすばらしいと思う。自分としてはディベートの能力をもっと高めていきたいので、その面からももっと皆が発言してくれるようなテーマを求める。
- 普通の授業、講義とは違って建設的な話し合いができるので面白い。良い授業だと思います。
- 基礎ゼミで色々な意見を言い合う場所を用意してくれたことは非常に良い事だと思うが、なかなか自分の意見が出て来ない。まだまだ知識不足と経験不足。なぜ、自分はこの事態や意見についてそう思うのか、考える場、時間をもっとふやしてほしい。基礎ゼミだけじゃなくて、何かを体験するとか、色々な方法の授業を受けたいな。
- 今までの基礎ゼミの授業は、目的の通りにはいっていないと思う。みんな静かだし、なにか暗い、変な緊張感みたいなものがある。もっと楽にどんなことでも発言できるような雰囲気づくりが必要だと思います。そのためにはもっと一人ひとり積極的に参加することが必要だと思います。
- 日常生活の中で、会話として取り扱わないような諸問題をテーマとして討論することはとても良い事だと思う。普段は遠く感じる諸問題についてあれこれと考察できるだけではなく、お互いの違った価値観を認め合ったり、指摘しあったりできるからです。ただ高校は、基本的に大学受験のために暗記を強いてきたので、いきなりレジュメを書いてと言われてもすんなりとはできないところがあります。
- みんな初体験だと思うから静かなのかもしょうない。もうちょっとみんなの関心があるテーマだと少しはにぎやかになるかも…。
- テキストが自分の生活と遠いというか、そういう社会ににいるということとは理解できるが、あまり直接関わらないので興味があまりわいてこない。学生の好きな興味のあるテーマをみんなで討論できたら楽しいし、そのほうが意見も出やすいと思う。
- 最初はやり方がわからないし、人の前で発表は苦手でもやりたくなかったけれど、やっていくうちに自分の好き勝手にできるし、人前で話すのも少人数でみんな知ってる人だから普通にできるようになった。これから社会に出て必要なことだから、今のうちに慣れておきたい。
- やっぱりまだ慣れない部分もたくさんあるから、うまく意見を出せないですね。私は基礎ゼミで扱っている内容は興味があるものばかりなので、いいと思います。普段このような内容について真剣に考える機会がないので、基礎ゼミはそういった部分でもとても有益な時間だと思います。少しかたいぐらいの内容でもいいと思いますねー。いずれ私たちが考えていかなきゃいけないものだと思うので。

手を変え品を変え、基礎ゼミはゆく

ゼミで扱うテーマ、教師の指導のあり方、授業に臨む学生の姿勢、等々、改善の余地はたくさんあるようだ。とはいえ、高校までこういう形態の授業を受けてこなかった割には、わずか2・3カ月で、だんだん授業の雰囲気がよいものになってきている、というのが教師の共通した感想だ。いずれにせよ、こうした学生の率直な意見を取り入れながら、我々教師は、いろいろと策をもって授業にのぞんでいるところだ。例えば、

- ゼミを盛り上げるためのネタを前もってレポーターと一緒に練り上げてゼミにいとむ
- ゼミ内にグループをつくりグループ単位で発言させるなど意見を言いやすい雰囲気をつくる
- ゼミを盛り上げるワザを教師同士で共有したり、ゼミでコンパ・懇親会・スポーツ大会をひらく
- 基礎ゼミ発表会などゼミを超えて学び合い、交流する
- 教室をでて調査活動を通じた学びを実践する…等々である。

こうした奮闘(労苦?)が示すとおり、基礎ゼミ自体が教師と学生の協同で創造されてゆくのであり、基礎ゼミはどこまでも発展の可能性をもっているのである。

Let's join 基礎ゼミ!!

生まれは農家 私は農家の三男で、「勝」という名前から分かるかもしれないけれど、戦時中に生まれたんですよ。鬼畜米英に「勝」ちたい、という気持ちで、親は名づけたんだね。私が生まれた信州諏訪というところは、世界のオカヤと言われた日本製糸業の中心地に隣接していて、明治の頃から「コメとマユ」の有名な地域でした。戦時中には、時計のセイコーなどが疎開してきて、精密工業、中小企業が発展しました。でも50年代までは、養蚕もなお盛んで、米作は食糧制度に支えられて拡大し続けていました。私自身、小4から中2くらいまでは、農家の手伝いをよくしましたね。田植え、稲刈り、桑の葉もぎなどは、もちろんです。毎朝登校前に、山羊の乳を絞り、サイダービンに詰め替えて、近所に数軒、配達したこともあります。その頃は、豆トラ(小型のトラクター)など機械力が普及する前でしたから、農作業や運搬など、全部人力です。農繁期や養蚕期は、本当に大変で、親たちのあまりの苦勞に、そっと涙したこともありました。あのころは、農家は現金収入がなくて、働けど働けどみんな貧しかったし。親の肩たたきやいろいろの手伝いなど、喜んでとはいわないまでも、決して厭いはしませんでした。ともあれ、戦後の貧しい農村でそうした少年期を送ったことが、高校と大学の受験勉強や後々の研究生生活で、ねばりつよさというか、ねちっこさ(笑)のものになっていると思うんですよ。

社会への関心と、心惹かれた経済学論争

高校を卒業し、あこがれて北海道にやってきました。農業経済学科に所属したんですが、実際には教養課程のころから、マルクス経済学への関心が強かったですね。あのころは55年体制の初期、社会も非常に激しく動いていて、学生運動とか安保闘争とかって、聞いたことがありますか？ もっとも、私自身は、ちょうど60年と70年の両アンボ間の沈滞期に大学生生活を送っています。しかも、北大新聞会に所属し、「記者」としてなるべく客観的でありたいなど思っていて、学生運動の中心というより、いつも周辺にいた感じですね。次第に激しくなっていくセクト間の紛争やテロリズムの横行には、本当に失望しました。それでも、以前から、叔父が関東軍の特務機関員で二十歳そこそこで玉砕した話を母親から聞かされてきました。また親戚に何人も満州や中国からの引揚者がいて、その人たちから戦中戦後の外地の悲劇や混乱を聞かされていたこともあり、自分なりに、東アジアの戦争と平和、社会と政治への関心というのはかなり強かったと思います。

そしてちょうど私が大学生だった60年代ですね、戦前の(労農派と講座派の)日本資本主義論争を引き継ぐ形で、マルクス経済学の研究が復活し、高揚の絶頂期を迎えていました。冷戦体制と共産圏の拡大がその追い風になっていたことも事実です。私は、学会では少数派の宇野経済学に非常に関心をもちました。宇野は、戦前からの論争・研究の積み重ねの上に立って、異説(マルクスの『資本論』とレーニンの『帝国主義論』を原理論と段階論とに再構成し、それらを基礎理論として現代の世界政治体制を分析すべし、といういわゆる三段階論)を唱えたのです。さっそく宇野学派の内外から、そうそうたる論客がでてきて、かれらの大論争なんかをみていると、もうなんかそういうアカデミズムの世界に心を惹かれていったわけ

すよ。そして社会の激動の中で、この世界をどう考え、どう生きたらよいのだろうか、自分自身でも、そういう人生論的な悩みもあったころなので、納得のゆく説明を与えてくれる(かのような)理論体系だったんですね、宇野理論は。

それで、私はいったん短大に就職したのですが、マルクス経済学を基礎から勉強しなおしたいという気持ちが強かったものですから、既に結婚をしていて子供も一人いたんですが、博士課程に入れてもらい、研究をはじめたわけです。しかし、以後、長年にわたった私の研究の結論は、シュンペーター理論を参考にして、宇野理論を全面的に改訂する、というものでした。

現在の研究テーマ、苦悶と発見の教育活動

本学経済学部には、'75年に赴任したので、もう30年弱になりますか。いまは、とりわけ共産圏の崩壊以降、マルクス経済学は、メッキが剥けて、奢れるもの久しからず、ということでしょうか。しかし、視界を広げて見れば、今日のこの経済の混迷というか、それに対する経済政策も混迷している中で、経済学に求められていることは非常に多いと思うのです。ポスト冷戦におけるグローバル化と少子高齢化のなかで、これからの国家・企業・家族はどうあるべきか。それに、不況の克服や地域経済・社会問題も、経済学が、真正面から総力を上げて、取り組むべき課題です。いまの私の研究テーマを端的にいうと、「国家形態とコーポレート・ガバナンス(比較政治経済学研究)」ということになりましょうか。そのためにこそ、宇野の原理論・段階論にわたる抜本的な組み換えが必要となるということです。

家庭の内情は教えません(笑)。ただ、学生とのかかわりで思うのは、自分の子どもが成長して、だいたい大学生ぐらいになってくると、学生を見る目が相当に変わってきますね。例えばいまの学生の就職難とか、とても他人事とは思えない。ちょっと前までは、大学の先生は、研究者っていうか、自意識が強すぎて、研究優先でやってきて、教育にそれほど熱心ではなかったではないですか。そういう意味では、学生の教育をもっと真剣に考えなきゃいけないあつて思うようになってきたのは恥ずかしながら、比較的最近だよ。それで、じゃあやるかと思っても、そういうふうになつた時に、なかなかそういう力がもつたないわけ。学生諸君の方も、こんな歳とつたおっさんに対してひいているんじゃないかな、と勘ぐったり。だから、一所懸命やろうとしているけども、どこかでやはり、若いひとたちとどうも溝ができてきているなつていうかな。

ただそれでも、今年から始まった基礎ゼミは、今のところなかなかいい感じで進んでいます。ゼミの会長・副会長をボルダ投票で決めたり、ソフトボール大会の参加をみんなできめたり、ゼミ生も礼儀正しく、また活発で。テキストは『活力と魅力ある日本をめざして』(経団連出版)です。やっぱり先生も、授業のあり方を模索したり、それから、学生とかかわるつていうか、学生にさざりこんでいくつていうか、たとえ距離感・ギャップがあつても、逃がさないぞと、確かにそういう姿勢が大事だよ。そういう意味では、この私の頁のタイトルは、「教育に苦悶する年配教師」つていうことでどうだろうね。教育に苦悶している、でも頑張らなきゃつて励んでいる教師、つていうことで(笑)。

【私の履歴書】

河西 勝 教授

担当講義 ● 経済学原理

PROFILE

- 1942年 長野県諏訪市に生まれる
- 1966年 北海道大学農学部農業経済学科卒業
- 1968年 同農学研究科修士課程修了
- 1968年 簿記学担当で美幌農工短大に勤務
- 1970年 北海道大学経済学研究科博士課程に入学
- 1972年 同経済学部助手
- 1975年 北海学園大学経済学部教授

主な論文
・「マルクス経済学の自省と転換」『経済論叢』第48巻第3・4号(北海学園大学経済学会)

現在の研究テーマ
「グローバル化とコーポレート・ガバナンス」



[学生諸君へ]

経済学の勉強は、何でもよいですが、自分なりの問題関心やテーマを見つけ出すことができるかどうか、にかかっていると思います。この場合に、人々の世界観が大きく混迷している今の時代、大学1、2年生の、比較的気持ちに余裕(または空白)のある時期に、思い切って古典的な論争の書に頼むことを、お勧めします。たとへば、『共産党宣言』(K・マルクス)と『社会主義』(M・ウエバー)とは、前者は共産主義思想の書として、後者はその批判の書として、ともに有名です。両者をつき合わせながら一緒に読んでみてください。20世紀の人々の思想的戦いを自ら追体験し、そして、新世紀に入つて、経済学は、何のためのものか、どうあるべきか、自分なりにある種の予感を得ることができる、と思います。

海と船への憧れから水産学の世界へ

生まれは兵庫県尼崎市ですが、育ちは大阪です。父親は化学工場の技術屋だったんですが、私は漠然と自然を相手に生きてみたいと思ってました。中学時代には船乗りになりたいと思っていました。北杜夫の『どくどくマンボウ航海記』を読んだことや、伯父が捕鯨船の通信局長をやっており、船乗りの自慢話を聞かされた影響もありました。しかし、高校生になって哲学や経済にも興味が湧き、将来に関し少し迷いが出てきました。そこで、私を京大農学部水産学科受験に決めさせたのは、受験直前に日本の漁船が南太平洋で「恐竜の骨」(?)を引き揚げたというニュースが流れたことでした。実際は、ジンベエザメという大型のサメの腐乱死体だったようですが、この件で海に対する憧れがまたまた盛り返して来た訳です。

大学・大学院時代

京大では学部・大学院を通じ合計10年間過ごしました。学部では「漁業経済学」を専攻、大学院では「農業経営」や「水産物の流通」を研究し、博士論文は「魚類養殖の経営問題」に関するものでした。経営を研究する必要性から、会計や簿記にも興味を覚えました。私は、自分が生来の怠け者なんで、一生懸命働いている人々をながめたり、記録をとって観察するといったことが好きです。京大に入学して残念だったのは、実習船が小型で外洋には出ることができなかったことでした。一方、最も印象に残っているのは、大学院のゼミの発表で、私が「…と思う」とか「…と感じる」と発言したことに対し、「[思う]や[感じる]というのは学問ではない。論理を積み重ねるのが学問だ」と、当時指導を受けた恩師から厳しく言われたことです。それ以来、私は、自分の仕事については、常に論理的でありたいと思うだけは思ってるのですが…。大学時代の反省としては、数学と英語だけは、もっと若いうちに真面目にやっておけば良かったということです。

九州と北海道に赴任

初めて講師の職を得たのは1987年ですが、宮崎にある南九州大学に赴任しました。所属は園芸学部農業経済学科で、「農業協同組合論」を担当し、5年半ほど過ごしました。その後1993年に北海道大学に移り、水産学部所属ということで函館に居住しました。水産関係の研究をしているうちに、水産物の廃棄物に興味を抱き、そこから私の「環境経済論」の研究がスタートする訳です。ただ、私の関心は廃棄物そのものというより、本来廃棄物ではなかったもの(たとえば食品残渣や畜産排泄物、さらには古紙など)が、廃棄物として処理せざるを得なくなっている社会システムにあります。ついでに言えば、水産関係と同時に、もともと競馬が好き

だったのですが、ひょんなことから中央競馬会の調査研究事業に参加させてもらって以来、競走馬の経営実態調査をやるようになりました。日本には競走馬を生産している牧場が1600ほどありますが、その内約1200は北海道・日高地方にあるんですよ。そして、その後、2000年4月北海学園大学に教授として赴任し、現在に至っている訳です。

環境経済論・廃棄物と馬産

私は本学で「環境経済論」の講義を担当し、環境問題の経済分析における諸理論・研究を教えています。環境経済論の最大のテーマは、「豊かさとは何か」といった問いのように、「価値観を経済学に位置づけること」だと思います。そして、研究テーマは、「廃棄物」と「馬産」の二つです。廃棄物に関しては、ゼミで「ゴミ問題とリサイクル」などを扱っています。馬産とは馬を生産することで、私は「牧場経営の問題」と「公営競馬の社会的位置づけ」を研究していますが、残念ながら講義・ゼミはありません(たぶん日本のどの大学にもないでしょう)。また、一昨年から北海道地方競馬運営委員も務めていますが、今日地方競馬は売り上げが減少傾向にあり、牧場経営も大変な時代に入っています。公営競馬が健全な形で発展していくことを願ってやみませんが、そのお役に立てればと思い日々活動しています。



イラスト by ヨメ

私の趣味

最後に、付録になりますが、私の趣味はまず馬と海です。馬は利口で可愛いものです。海は神秘的の源と言えます。次に、映画と落語ですが、本学に赴任してからは映画もよく見に行くようになりました。札幌に来てからと言えば、女子プロレスも見に行くようになりました。すごい迫力だと感じています(アルシオンの吉田万里子、好きですね)。札幌は住みやすい良い街だと思います。最後に、私はホームページを開発しています。本当は自分の講義を補足したり、研究内容を公開するつもりで開設したのですが、シャレに付け加えた趣味のコーナーの方がいつのまにやら中心になってしまいました。でも、私が出した過去の試験問題なども掲載していますので、是非とも一度ご覧ください。お待ちしております。

(<http://homepage2.nifty.com/a-ichi/>)

【私の履歴書】

古 林 英 一 教授

担当講義 ● 環境経済学

PROFILE

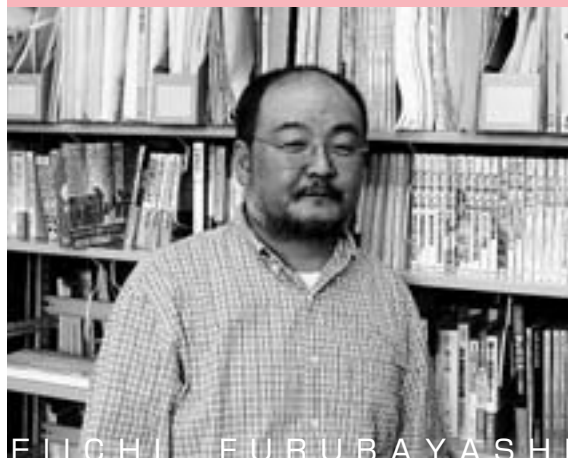
- 1958年 兵庫県尼崎市に生まれる
- 1982年 京都大学農学部水産学科卒業
- 1984年 京都大学大学院農学研究科農林経済学専攻修士課程修了
- 1987年 京都大学大学院農学研究科農林経済学専攻博士課程中退(指導認定)
- 1987年 南九州大学園芸学部農業経済学科講師
- 1992年 南九州大学園芸学部農業経済学科助教授
- 1993年 北海道大学水産学部漁業学科講師
- 1995年 北海道大学水産学部海洋生産システム学科助教授
- 2000年 北海学園大学経済学部教授
- 2001年 北海道地方競馬運営委員

主な論文

- 「水産物流通の静脈機能不全—危機に立つ魚腸骨処理業—」地域漁業学会『地域漁業研究』37巻2号、1996年10月
- 「水産物消費とリサイクル」北日本漁業経済学会『北日本漁業』30号、2002年4月
- 「産地競馬としての「ホッカイドウ競馬」」北海学園大学経済学部『北海学園大学経済論叢』49巻1号、2001年6月
- 共著『新たな時代の軽種馬生産』(日本中央競馬会、1999年12月)

現在の研究テーマ

- 「食料リサイクル成立の社会・経済的条件」
- 「地方競馬を中心とする公営競馬の今日的課題」



EIICHI FURUBAYASHI

[学生諸君へ]

私が学生諸君に望むことは、まずは無事に卒業してほしいということです。で、できれば、世の中の動きに「ホンマか?」とツッコミを入れることのできる社会人になってほしいと思います。ツッコミを入れるためには、相手をちゃんと理解するだけでなく、それを自分なりに解釈し直す作業が必要です。世の中、一意的な解が存在することは殆どありません。たいていの場合、解はいくつもあります。いくつもの解を探し出せるようになってほしいと思っています。

『YOSAKOI』は、 一人ひとりが主役になれる

北海学園YOSAKOIソーランチーム『粹』をたずねて



初夏の札幌の地域イベントとしてすっかり定着した『YOSAKOIソーラン祭り』。その北海学園チーム『粹』のメンバーである経済学部4年生古藤敏久君、3年生の大島絵美さん、千徳優君、竹内麻弥さんの4人から今年の活動について聞きました。



— 『YOSAKOI』と出会ったきっかけは？

■千徳君—高校時代は野球をやってましたが、大学で本格的にやるのは大変そうだったので、みんなで集まり新しく始める『YOSAKOI』ならできる(笑)、と思い入りました。

■竹内さん—高校の時に、一度テレビでは見ました。実際の踊りを見るのは試験期間中でできなかったの、それなら大学に入ったらやってみようと思い、今年も頑張りました。

■大島さん—全然『YOSAKOI』に関心がない友達と一緒に西8丁目ですぐに初めて見て、すごくカッコイイ！これは、やるしかない！と。学園に入り調べたらチームがあったので参加しています。

■古藤君—高校の時は剣道をやってたのだけど [(一同)えー、知らなかった(笑)]、中学校の時に地元のチームから出たことがありました。大学では剣道は段もちが多そうだったので、たまたま『YOSAKOI』のチームがあることを知って「いいなー」と思い、入りました。

— 『粹』の組織と活動はどうなっているんですか？

■大島さん—代表・副代表と、渉外、会計、振り、曲、衣装、地方車、総務、そして企画。各担当のスタッフは22名になり、メンバーは144名います。企画は、飲み会とか仲間の交流をはかるためにもあります(笑)。新入生の勧誘方法はサークルと同じようなもので、今年は45名、去年は60名を超える1年生を集めました。

■古藤君—2月から合宿をして、そこから徐々に本格的に踊りの練習を開始します。でも、そのずっと前の7・8月からもいろいろな課題があり、取り組みは始まっています。

■大島さん—合宿では、10時間位は練習をやっています。もちろん、ミニバレーとかも含めてですけど(笑)。総勢80名ぐらいが参加しまし

た。5人の「振り」担当が仕切りながら、学内の会議室とか豊平川河川敷、あと小学校の運動場などを借りて踊りの練習をしています。

— 今年のまつりへの取り組みは、どうでしたか？

■千徳君—私は衣装を担当しました。ほか3名の衣装担当者と先生と業者さんとの間でいろいろアイデアを考え出します。お金も、まあ、かけている方です。今年のテーマは「獅子」でしたが苦労しました。そのままの表現では『YOSAKOI』として見栄えがよくなかったの、獅子のイメージを、自分達のチームが目指している「粹」にどう表現するのか。衣装だけでもなかなか難しいし、結構大変でした。

■竹内さん—そう。今年は、踊りも結構ハードだった。

■古藤君—疲れてそうでないよう、疲れる。年々ハードになってきたかな。でも、100人以上でひとつのものを創っていく経験、それを自分達でやっていく、というのはやっぱり面白い。終わった時は、みんなで感動です。

■千徳君—練習の時も、のってる時は、「やったなー」という感じですよ。

■竹内さん—のってなかったら、何回もやる。途中ではやめられない(笑)。

■大島さん—練習は1日2時間から3時間くらいで、本番が近づいてくると週5日練習しました。本番の踊りの時には、大通りの道のど真ん中で精一杯踊れる。これは、普通の体験じゃない [(一同)それが、祭りだ！(笑)]。本当に貴重な経験、というのが実感です。

— みなさんにとって、『YOSAKOI』とは一言にすると何ですか？

■全員—「一人ひとりが主役になれる！」。なんといっても、それが魅力です。